

博士論文

フローベールと男性社会
Flaubert et la société masculine

指導教授

菅谷憲興 教授

文学研究科 フランス文学専攻

森本 悠人

フローベールと男性社会

目次

序論.....	4
第1章 フローベールとジェンダー.....	18
第1節 時代の空気.....	19
1. フローベールと同時代のミゾジニー.....	19
2. 同時代の文学と男らしさ.....	26
3. フローベール作品の受容.....	50
4. 19世紀のフローベール像.....	67
第2節 フローベールの書簡.....	69
1. フローベールのミゾジニー.....	70
2. ルイーズ・コレと男になること.....	74
3. ルロワイエ・ド・シャントピーと文学場のジェンダー.....	85
4. ジョルジュ・サンドの二つの性.....	95
5. フローベールのジェンダー・イメージ.....	110
第2章 『ボヴァリー夫人』と（非）男性支配.....	113
第1節 家父長としての男性、妻=母としての女性.....	114
1. 家族関係とナポレオン法典.....	115
2. オメー家、あるいは規範的な家族.....	117
3. エロイーズとシャルル、そして田舎風俗.....	122
4. ボヴァリー家と家父長制.....	133
5. 『ボヴァリー夫人』裁判とシャルル.....	144
第2節 女性の読書と男性支配.....	146
1. 19世紀における読書.....	147

2. 読書する女性の描写	150
3. 読書リスト	153
4. 読書に関する言説	167
5. 反転される男らしさ	179
第3章 『感情教育』の/と男性社会.....	181
第1節 男性社会への異議申し立て	182
1. 歴史の表象とヴァトナーズ.....	183
2. 女性たちの言説	192
3. フェミニズムへの視線：社会主義の女性か、青鞥派か	202
第2節 男性社会、男同士の絆、そして独身者	203
1. 男らしさの時代	203
2. 決闘と男らしさ	215
3. 法学的言説：ブルジョワ社会の再生産.....	229
4. 法学部生、あるいは19世紀の独身者.....	250
5. 男らしさの裂け目	269
結論.....	272
参考文献.....	282
仏語要約.....	314

論文の要約

本博士論文はフローベールのテキストを男性社会における男性性および女性性の困難に焦点を当て分析するものである。それによってフローベールを19世紀のジェンダー構造やその文脈で捉え直し、新たな作家像を提示することを目的としている。

まず、19世紀フランスを一言で要約すると「男性社会」といえるだろう。19世紀初頭に制定されたナポレオン法典にはそれを象徴する「夫は妻を保護し、妻は夫に従わなければならない」という一文を見出すことができる。しかしそのように明文化しなければならなかったのは、伝統的な家父長制が崩壊したことの裏返しだと言える。

フランスにおいてジェンダー構造の地殻変動は18世紀末に起こった。古代ローマからアンシャン・レジームの終わりまで、家父長の権威は安定的なものであった。大革命によって男性たちの安寧は脅かされたのだが、1804年のナポレオン法典の制定で再び心の安らぎを取り戻した。とはいえ、それは決して揺るぎないものではなかった。

19世紀において男らしさの理想像は変化した。ナポレオン戦役とそれに続く数十年は、暴力性とそれに憧憬を抱く男性たちの世紀であった。例えば、バルザックは『ゴリオ爺さん』でラスティニャックを野心に満ちた力強い男性像を体現する存在として描いたと言える。一方で19世紀後半にはそうした男性像を引き受けることが困難になっていったのではないか。実際、世紀後半にはそうした男性像が崩壊の兆しを見せるのである。「男らしさの危機」と呼ばれる現象が起こり、反動として男性社会を存続させようとする力が強力に作用した。例えば、ドーミエなどによる女性を諷刺する版画、あるいはドールヴィイのように女性嫌いを隠すこともない文学作品に「男らしさの危機」の表出を見ることができる。そうした背景への理解はフローベール作品の理解をより豊かにしてくれるものと思われる。

ところでこの男性社会においては男性も義務を負っていた。それは男性が女性を支配・監視することであった。また、男性は無条件に男性でいられたわけではない。男性が男性であると認められるためには、男らしさを周囲に誇示する必要があったのだ。ジェンダー研究の成果を援用する文学研究は、主に女性を、そして社会を支配しようとする「覇権的な男らしさ」を検討してきた。一方でジェンダー研究の領域では、近年その陰画である「従属的な男らしさ」にも注目が集まるようになった。『ボヴァリー夫人』や『感情教育』で描かれる人物をそうした「従属的な男らしさ」から読み解くことでその同時代的な意味が明らかになるように考えられる。これまでのフローベール研究において、女性の状況に着目するものはあったが、ジェンダー、とりわけ男性性の問題はしばしば等閑視されてきた。むしろ近年の研究でしばしば言及される男らしさの獲得の困難さに着目することで、フローベールのテキストの見過ごされてきた問題系を浮かび上がらせることができるのではないだろうか。

以上のような問題設定をした上で、本研究では主に『ボヴァリー夫人』と『感情教育』といった19世紀を背景とする出版された作品を扱い、また書簡、草稿、読書ノートといったコーパスも研究の対象にした。それらの作品を男性社会という観点から同時代の文脈に置

き直して読むという方法論を取り、歴史・文化史研究の成果を活かしつつ細部の描写を検討した。このようなコーパスと方法論のもと、本研究では、フローベールが男性社会をどのように描いたのかを明らかにし、またそれが同時代の文脈で何を意味するのかを論じた。

第1章第1節では、フローベールがどのような社会に身を置いていたのかを捉えるために、まずは19世紀を扱った歴史・文化史の成果を頼りに社会と男らしさの関係を論じ、それを書き留めていると思われる文学作品を検討した。男性社会のシステムや男らしさという視点から同時代の状況を眺めたとき、そこに明示的、あるいは暗黙の了解として男らしさの規範による抑圧の存在が浮かび上がった。ここではバルザック、ヴィニー、ミュッセ、ドールヴィイの作品を扱ったが、これらは近年研究の盛んな「男らしさの危機」という一連の現象としてまとめることができると思われる。ところで、フローベールはそうした同時代の枠組みに当てはまるのだろうか。

ついで『ボヴァリー夫人』と『感情教育』についての書評を取り上げることで、批評家たちが文学作品にジェンダー構造の再生産を求めていたこと、そうした観点から見たフローベール作品の位置付けを明らかにした。それによって、19世紀の男性社会には女性を支配する構造だけではなく、男性への抑圧も存在したことが浮かび上がった。

第2節においては、フローベールが自身の生きる世界をどのように認識していたのか、書簡を通して分析した。男性のイデオロギーを共有していない女性との交流を通して、フローベールは自らの小説美学を発展させた（とはいえ必ずしも同時代の男性の思考の枠組みからの脱却を意味しない）。書簡を見ていくことで、作家が19世紀的なジェンダー思考に依りつつ、フローベールの作家としての形成にジェンダー構造が影響し、さらに女性が重要な役割を果たしていたことを明らかにした。

第2章では男性支配を裏付ける当時の結婚や家族に関する法律を参照し、『ボヴァリー夫人』を読み解いた。第1節では『ボヴァリー夫人』に表象された19世紀の家父長制について、作中に描かれたそれぞれの家族像を分析した。作品の草稿まで含めて分析することで、意味を持たないかに見える決定稿における田舎風俗の描写が、実は草稿の段階では物語として機能していることを明らかにした。

そして、シャルルとエンマについて、それらの家族や当時の法律を比較参照して論じた。それによって夫には妻を監督する義務があることが明らかになった。シャルルもそうした義務を果たすべきであったのだが、エンマとの関係においてそうした家父長的態度を取ることはない。これまで妻エンマが議論の中心となることが多かったが、むしろ夫シャルルの身振りが19世紀ブルジョワの規範から逸脱していることを明らかにした。

第2節では、19世紀フランスにおける女性の読書行為がどのような権力に絡め取られているのかを同時代的文脈に沿って再考した。当時の女性はどのような本を読むことが好ましいとされてきたのかを論じ、エンマが読んだ本が悪書に位置付けられる場合があることを明らかにした。また、そうした本を読まないために夫は妻を監視する義務があったことを文化史や作品の草稿を通して検討した。読書という主題をめぐって草稿から決定稿に至る

過程を分析することによって、シャルルが執筆の進行とともに家父長的な姿を失い義務を果たさなくなっていくことを明らかにした。

そして第3章では1848年の革命を舞台にした『感情教育』を扱った。第1節では作中のフェミニズム的言説を主に扱った。ヴァトナズというマイナーな登場人物を1848年の磁場に置き、実在の人物たちの軌跡や言説に重ね合わせることで、彼女がユートピア社会主義の女性たちの言説の雑多な引き写しであることを明らかにした。ところで彼女はとある批評家に「青鞥派」と名指されていたのだが、フローベールはそれを否定している。その理由はフローベールが社会主義の女性と青鞥派を区別していたからに他ならない。作品とその下書き、フローベールが参照した資料の関係を検討するに留まらず、書簡や同時代の批評まで含めて見ていくことで、フローベールが女嫌いの作家であるという見方を再検討した。

第2節では『感情教育』における男らしさや男同士の連帯、男性社会のシステムを駆動させる制度を論じた。まず男性の専有物と思われていたまづ煙草が男らしさの象徴であると同時に、ホモソーシャルなものとして描かれていることを検討した。そして決闘が男らしさの儀礼であったこと、それが作中では中断されてしまうこと、さらにはジャーナリズムの対象になることを同時代的視点から分析した。また、大学の法学部が社会システムの再生産の場であることや、作品の主人公が最終的には社会の周縁的存在である独身男性になることを論じた。これらの主題を扱うことで、男性社会とそれを引き受けることの困難について論じ、男らしさに関する議論への接続を試みた。

フローベールは書簡において、自らのうちに女らしさをみとめることもあったが、基本的にはブルジョワ男性として自分を位置付けていた。男性社会のシステムは文学ジャンルや美学の問題にまで影響を及ぼしたが、フローベールがその中で小説美学を練り上げたことは文学史的に大きな功績だったと言える。一方でこの19世紀フランスを代表する作家も男性社会の抑圧から逃れることはできなかつたのである。

ところが彼が世に問うた作品ではそうした男性社会の支配は決して絶対的ではなかつた。フローベールは、小説によって見たままの世界を描き出すことを復讐だと述べ、『ボヴァリー夫人』においては家父長制を消極的に否定するシャルル、『感情教育』においては男性社会の再生産に象徴的に抗うフレデリックを描き出した。それは既存の男らしさを真っ向から戦いを仕掛けるものではないが、ヴァトナズのような女性による男性社会の外部からの批判はからかいの的として消費されてしまうだろう。フローベールの提示した男性像は、歯車に挟まった異物のように、権力関係に軋みを生む。フローベールはフィクション的想像力によって現実の世界を超えていくのである。